

平成 24 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」（共同利用型）
成果報告書

辻河典子

これまで申請者は、ハンガリーでの 1918 年 10 月末の革命で成立したカーロイ・ミハイ政権に参加した政治家による 1919 年秋以降の亡命政治活動について取り組んできた。その過程で、ハンガリーにおいて「ルテニア」と呼ばれる地域のマジャル化した知識人の中でのハンガリー・ナショナリズムの表出とその特徴について調査するの必要を感じた。（ここでの「ルテニア」とは、旧ハンガリー王国領、現在のウクライナ・ザカルパッチャ州を主に念頭に置いた地名である。）この地域では司教区独立の請願が 1843 年から出されており、1912 年 6 月にハイドゥードログ司教区の独立が認められた。また、ハンガリー史の観点からの先行研究では、「ルテニア人」意識がマジャル化したギリシア・カトリック教徒の東スラヴ系住民と結びつけられる傾向にある。

カーロイ政権は 1918 年 12 月に親ハンガリー勢力との交渉でサボー・オレストらによる自治政府を容認する。サボーも上述したようなマジャル化したギリシア・カトリック教徒であった。但し、同政権に参加した改革派知識人たちは世紀転換期よりブダペシュトを拠点に活動する中で「ルテニア人」意識についての具体的な関心を余り示していなかった。その一方で、この地域の知識人たちが当時のブダペシュトの政治・知識界をどのように捉えていたのかという点も考察する必要があると思われる。

以上のような問題意識から、申請者はスラブ研究センターに平成 25 年 2 月 18 日（月）から 22 日（金）まで滞在し、ルテニア地域在住のギリシア・カトリック派知識人が集った週刊紙 *Görög Katolikus Szemle* を中心に、彼らの言論活動に表れる「ルテニア人」意識と対ブダペシュト認識について文献調査を行った。同紙はウングヴァール〔ウジホロド〕で 1899 年から 1918 年まで発行され、スラブ研究センターには Rare Ukrainian Serial Publications のシリーズの一つとして 1899-1915, 1918 年刊行分がマイクロフィルムで所蔵されている。

今回収集した文献については、現在分析を進めているところである。確認した範囲では、先行研究で指摘されているように、第一次世界大戦末期までにハンガリーの上部地方において、ハンガリー王国の枠内で「ルテニア人」意識がギリシア・カトリックという宗派を軸として形成されていたことを明確に読み取ることができる。そこで対比的に言及されるのは「スロヴァキア人」であり、彼らとは異なる集団として「ルテニア人」を位置づけようとする論説も見られる。また、*Görög Katolikus Szemle* は寄稿者に聖職者が含まれていたことが推定されることから明らかなように、社会主義運動や社会科学協会などブダペシュトで活動する改革派知識人に対しては批判的な論説が掲載されていた。

所蔵資料の都合上、第一次世界大戦期の大半の記事を確認することが残念ながらできなかったため、今後は他の史料も参照しながら、第一次世界大戦期の同地における「ルテニア人」意識の展開を調べることが必要だと思われる。また、この地域は第一次世界大戦後の、更には第二次世界大戦後においても、国境変動の影響を強く受けており、より長期的な視点で「ルテニア人」意識については考察する必要があるだろう。この点も今後の課題としたい。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えて下さったスラブ研究センターには心より御礼申し上げます。